

小さな弟、良ちゃん

小川未明

青空文庫

「良ちゃんはお姉さんの持つている、銀のシャープペンシルがほしくてならなかったのです。けれど、いくらねだっても、お姉さんは、

「どうして、こればかりは、あげられますものか。」と、いわぬばかりな顔つきをして、うんとはおっしゃらなかったのです。

お姉さんは、良ちゃんをかわいがっていました。英ちゃんや、義雄さんよりも、かわいがっていました。それは、良ちゃんはまだ小さくて、やっと今年から学校へ上がったばかりなのです。

「お姉さん、その光った、鉛筆をおくれよ。」と、また思い出したように、お姉さんのところへやってきました。いままでにも、だめといったのが、無理に頼めば、しまいにはきいてもらえたので、シャープペンシルにしても、いつか自分のものになると思ったからです。

「こればかりは、だめよ。」と、お姉さんは、おっしゃいました。

「だめ？　じゃ、ちよつと僕に見せておくれよ。」と、良ちゃんは、小さい手を差し出しました。

「だめよ。なんといつても、これは、良ちゃんにあげられません。お姉さんが、使っているのですもの。」

「見せて、おくれよ。」と、良ちゃんは、けっして、自分のものにはしないから、ただ手に取らしてよく見せてくれないかということ、顔色に現していました。

「ええ、見せてあげますわ。けれど、あげるのではなくてよ。」と、いつて、お姉さんは、ハンドバッグから、シャープペンシルを出して良ちゃんの手にお渡しになりました。

良ちゃんは、いつかもこうして、無理に美しい、コンパクトの容器をもらったことを思い出すと、今度も、これをもらえるのではないかと思いましたが、

「僕、これほしいな。」といつて、銀の軸に小さな英語の彫つてあるのをじつと見ていますと、

「こればかりは、いけないの。」と、お姉さんは念を押すようにおっしゃいました。

「僕の持っているもの、お姉さんにあげるけどなあ。」と、良ちゃんは、いいました。

「ほほほほ、良ちゃんは、どんなものを持っているの?」

「僕だいにしているものがあるのだよ。」

「どんなもの、良ちゃんのだいにしているものって、なんででしょう?」

「あれと代えてくれる？」

「それはわからないわ。どんなものか、私知らないのですもの……。」と、お姉さんは、
良ちゃんを見下ろして、お笑いになりました。

「こまと、水鉄砲と、まりと、ろうせき……。水鉄砲は、いつまでも貸しておいてあげるから……。」

「ほほほほ、良ちゃん、私、そんなもの、なんにするのよ……。」と、いつて、お姉さんは、良ちゃんのほつぺたをぷつと吹きました。

良ちゃんは、心持ち顔を赤くして、

「じゃ、みんなとなら、ペンシルと代えてくれる？」と、熱心にいいました。

お姉さんは、かわいそうになりました。

「私、今日、デパートへ寄るから、良ちゃんにいいのを買ってきてあげるわ。」と、お姉さんは、いいました。すると、たちまち、良ちゃんの目はかがやきました。

「ほんとう？ お姉ちゃん、僕にぴかぴかした、シャープペンシルを買ってきてくれる？」と、良ちゃんは、急に元気になりました。

「ええ、きつと、光つた、いいのを買ってきますよ。お姉さんは、お約束をして、うそ

をいったことがないでしょう？」

「うん。」と、良ちゃんは、うなずきました。そして、お姉さんの銀のシャープペンシルをお返ししました。

その日、お姉さんは、外からお帰りなされると、

「ぴか、ぴかしたのを、買ってきた？」と、良ちゃんは、飛び出しました。

お姉さんは、ニッケル製の子供持ちのを買ってきた。良ちゃんは、喜んで、

「どうも、ありがとう。」と、いつて、お姉さんにお礼をいいました。そして、それをさつそく洋服のポケットに差して、お友だちに見せようと遊びに出ました。

「良ちゃんには、光っていれば、みんな銀になつて見えるのね。」と、お姉さんは、その後ろ姿を見送りながらおっしゃいました。お姉さんには、その無邪気なのが、なんとなくいじらしかったのです。

きょうも、また、良ちゃんは、兄の英ちゃんに、釣りにつれていつてくれと、泣かんばかりにして頼んでいました。

「やだ、おまえ一人でゆけばいいだろう。だれかお友だちを誘つて……。。」と、英ちゃん

は、いつていました。

「ねえ、つれていつてよ。」と、良ちゃんりょうちゃんは、頼たのんでいました。英ちゃんえいちゃんは、釣つりぎおの糸いとをしらべたり、浮うきをつけかえたりしていましたが、

「もう生意なまいき気なことはいわんな。はいといえればつれていつてやる。」と、いいました。

「もういわんから、つれていつてね。」

「ああ、よし。」

「うれしいな。」と、良ちゃんりょうちゃんは手てをたたいて飛とび上あがりました。

「みみずを取りとにゆくのだから、これを持もつておいで。」と、英ちゃんえいちゃんは、いいました。

小ちいさな良りょうちゃんちゃんは、片かた手に紅こう茶ちやの空あきかんかんを持もち、片かた手に手てシヤシヤベルベルを握にぎつて、兄にいさんのお供ともをしたのです。

「まあ、威い張ばつているわね、にくらしい。」

窓まどから、小ちいさな兄きょう弟だい、二人ふたりの話はなしをきき、出でてゆうく後うろ姿すがたが見み送おくつていたお姉ねえさんは、

いいました。

そのうちに、二人ふたりは、みみずをとつて、帰かえつてきました。

「お母かあさん、早はやくご飯はんにしておくれ、みんなと釣つりにゆくのですから。」と英ちゃんえいちゃんが、い

いました。

「良三、途中で帰るなんていつたら、なぐるぜ。」と、英ちゃんがいました。

「ああ、いいよ。」

これをきいていたお姉さんは、もうたまらなくなりました。

「良ちゃん、釣りになんかゆくのをおよしよ。」と、お姉さんは、いいました。

「なんで？ 僕、ゆきたいんだもの、いつてはいけないの？」と、良ちゃんは、泣き出しそうになりました。

「だって、そんなにまでしていききたいの？」

「うん、ゆきたい。」

「じゃ、いらつしやい。英ちゃん、あんまり良ちゃんをしかつたら、ひどいから。」と、

お姉さんが、いいますと、

「じゃ、つれていってやらないよ。」と、英ちゃんは、いいました。良ちゃんは、泣き出してしまいました。そのとき、お母さんが、

「さあ、ご飯ができましたよ、仲よくしていつていらつしやい。」と、おつしやいました。良ちゃんは、ご飯を食べる間も英ちゃんの機嫌をとつていました。

そのうちに、みんなが外へ迎えにきました。二人は「いってまいります。」をしました。「気をつけてね。」と行って、お姉さんとお母さんは、見送ってくださいました。

英ちゃんは、さおを持ち、良ちゃんは、片手に、みみずの入った紅茶の空きかんを持ち、片手にバケツをぶらさげていました。ほかの男の子たちも、さおとバケツと紅茶の空きかんを持っていました。

お姉さんは、これまで見た、紅茶の空きかんといえば、たいていリプトンであったのが、いつのまにか、みんな和製を使用するようになったとみえて、リプトンの空きかんは、一つもないと思われました。ここにも、世の中の変化があらわれているような気がしました。

「良ちゃんは、さおがないの？」と、お母さんが、おききなさると、

「こんなものに、なにが釣れるかって……。」と英ちゃんが、笑いました。

「まあ、ご苦労な、ただバケツを持って子供をするだけなの。」と、お姉さんは、ほんとうに、良ちゃんがかわいそうになりました。

はや、みんなの姿は、かなたの道の上に小さくなりました。

「かわいそうに、それをつれてゆくとか、ゆかぬとか意地悪をしてさ。」と、お姉さんは、

涙ぐみ^{なみだ}ました。

「いえ、みんな小^{ちい}さいうちは、それで楽^{たの}しいんです。大^{おお}きくなると、わかつてきます。」
と、お母^{かあ}さんは、おっしゃいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「子供のテキスト」

1935（昭和10）年8月

※表題は底本では、「小《ちい》さな弟《おとうと》、良《りよう》ちゃん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さな弟、良ちゃん

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>